

真杉静枝文学における風景描写の役割

—「阿里山」を中心に—

台湾大学修士課程 顔好軒

真杉静枝（1901-1955）が戦時下にした台湾先住民族や山地をテーマにした作品には、1937年に国立公園に指定された阿里山が舞台として頻出していた。当時日本の国立公園は単なる自然の美を表すだけでなく、国粋主義や帝国主義の文化装置としても機能していた。その風景は「日本を代表する風景」として国家イデオロギーのもとに価値づけられ、特定の表象空間を形成していた。特に、阿里山は植民地台湾の進歩を象徴する場所とされ、小説「阿里山」における風景描写は物語の中で重要な役割を果たしていると考えられる。

本稿では、先行研究を踏まえ、「阿里山」における風景描写に着目し、その役割について考察した。その結果、本島人の居住地に関する風景描写には「未開」や「不潔」といったイメージが強調され、「未完の同化空間」としての性格が際立っている。一方、阿里山の描写には国立公園の理念が具現化され、その風景が内地文化や植民地支配の理念と結びつくことで「帝国の空間」を構築していることが明らかになった。このように、風景を媒介として植民地台湾の内部に対照的な空間とそのヒエラルキーが形成されており、風景描写を通して阿里山を同化の模範として位置づけていた静枝の意図が窺える。